

大友時代を 生きた人々

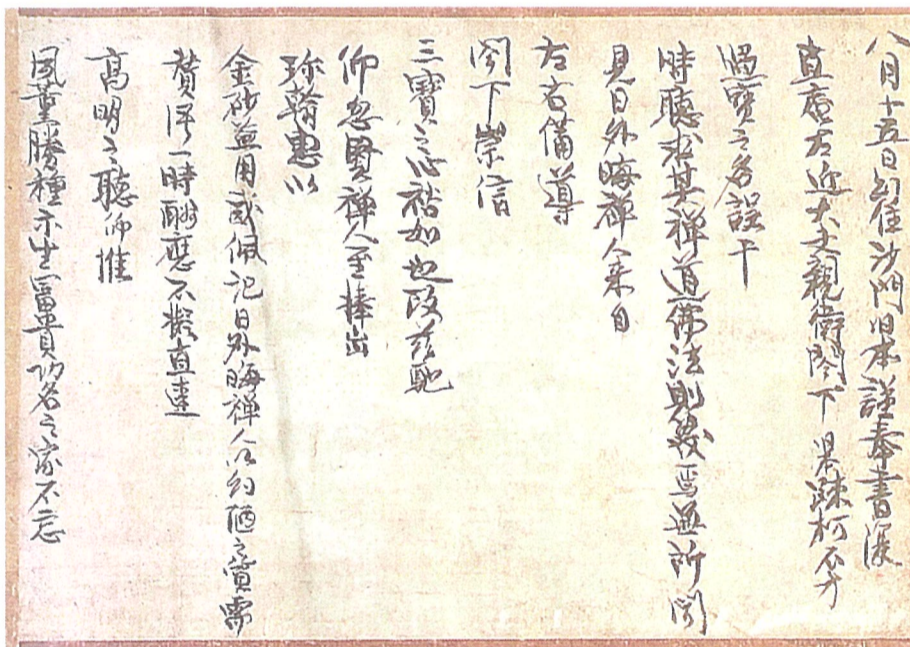
鹿毛 敏夫

無隠元晦

東京の静嘉堂文庫美術館に保管される重要文化財の中に、中峰明本墨蹟「大友直庵に与う尺牘」という史料があることは、以前に紹介しました。中国元の時代の高僧中峰明本が、鎌倉時代末期の九州の武将大友貞宗に宛てた手紙です。

その読みは次の通り。「八月十五日、幻住沙門明本、謹んで書を直庵左近大夫親衛閣下(大友貞宗)に復し奉る。明本疎朽不才にして、過宝の名は時聴に誤る。その禅道仏法を求むれば、則ち焉を蔑み聞見する所無し。日外晦禅人(無隠元晦)来たりて左右より備導す。閣下、三宝を崇信するの心、裕如なり。茲に馳仰を致す。忽ち賢禅人至りて珍翰を捧出し、恵心に金砂を以てす。益用つて感佩記す。日外晦禅人、幻陋の質を以て贊語を需心。一時の酬応、高明の聴に直達するに擬せず。仰ぎ惟んみるに、風は

鎌倉武将と中国高僧の文化的媒介者



中峰明本墨蹟「与大友直庵尺牘」(静嘉堂文庫美術館蔵)

勝種に薫り、富貴功名の家に生ぜんことを示さん。不忘。」
中峰明本は、南宋末の景定4

(1263)年に中国杭州銭塘県に生まれ、天目山に参禅して宋末元初を生きた高僧です。元代禅界の第一人者ながらも、国家権力には一切近づかず、至治3(1323)年に入寂するまでの生涯を林下(在野)に徹したその生き方が、内外の人々に大きな影響を与えました。大友貞宗から届いた書翰への返書として、したためたのがこ

の尺牘です。中峰は、自らが不才で、世評の名声は誤りであり、禅道仏法を求められても聞見すべきものはないと謙遜しました。その上で、日本から来た僧無隠元晦が自分の世話をしてくれていること、貞宗が仏教三宝を厚く崇敬していることを聞いて尊仰していたところ、賢禅人を使いとして書翰と金砂を恵与され、ますます感激したこと、無隠が自分の頂相(肖像画)に贊を求めたため応じて返したが、高明な貞宗の意にかなうか気がかりだと記しています。

注目したいのが、無隠元晦なる日本僧の存在です。修行のため中国に渡り、弟子として師匠中峰の身の回りの世話をするとともに、中峰の賛入り肖像画を制作しました。書翰中で「日外晦禅人」と呼ばれた無隠は、豊前国田川(福岡県田川市)出身。貞宗の庇護を受け、元で16年間の修行を遂げます。

帰国後は、貞宗が筑前国多々良(福岡市)に創建した顕孝寺の住持になるなど、大友氏から厚い帰依を受けた禅僧です。鎌倉時代の武将と中国の高僧との、文化交流のメッセンジャー(媒介者)となったのが、留学僧の無隠元晦だったのです。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載